

# ロータリーコラム

## 第2回

2016-17年度ガバナー  
刀根 莊兵衛



### ロータリー精神、ロータリーの理想(理念)とは何でしょうか。

今回は、ロータリー精神(The Rotary Spirit)、ロータリーの理想(理念)(The ideals of Rotary)とは一体どのようなものか、またそれはどのように生まれ、現在どう定義されているのか、その歴史を振り返りながら、皆様とご一緒に考えてみましょう。

#### 1. ロータリーの誕生

ロータリー精神の誕生を考える上で、最初に考えなければならないことは、なぜロータリーが誕生したかということだと思います。

1935年、ポール・ハリスはマニラで開催されたロータリーの第5回太平洋地域会議に参加する途中、初めて日本を訪れた時、ある日本のロータリアンから質問を受けます。

「あなたはなぜロータリーを作ったのですか」

この質問に、ポール・ハリスは「ただ寂しかったからです」と応えたという話はあまりにも有名ですが、実際、ポール・ハリスは、This Rotarian Ageにその誕生の経緯を次のように書いています。

「ある晩のことでした。私は同業の知人に誘われて、彼の郊外にある家を探ねました。夕食後、二人で散歩に出かけたのですが、店の前を通るたびに、友人は店の主人と名前を呼び合って挨拶をしていました。私は、はたと、ニュージーランドのウォリングフォードのことを思い出しました。その時、この大都会シカゴで、各種の職業から政治や宗教の立場を離れて、お互いの意見を大らかに認め合えるような人を、一人ずつ選んで親睦団体を作ったら、という構想が浮かびました。もし、こんな団体ができれば、お互いに助け合えるはずです。」

つまり、ポール・ハリスがロータリークラブを創った時、最初から高邁な理想や理念があったわけではなく、『大都会シカゴで、各種の職業から政治や宗教の立場を離れて、お互いの意見を大らかに認め合えるような人を、一人ずつ選んで親睦団体を作る』という単純な構想からの出発だったのです。

実際、最初のシカゴ・ロータリークラブの定款には、その目的として、1)本クラブ会員の事実上の利益の向上 2)通常社交クラブに付随する親睦およびその他特に必要と思われる事項の推進、この2つが謳われています。しかし、その翌年、ドナルド・カーターから「互恵的關係だけで、社会に役立つことをしないクラブは社会的存在意義が

ない」と強く批判され、その後すぐに定款に、3)シカゴの最大の利益の推進、及び市民の誇りと忠誠とを市民の間に広めること、という3つ目の綱領が加わりました。そして、このことによって、ロータリーはやがて地域社会の人びとの生活向上のための社会奉仕活動にも力を注ぐようになるのです。

#### 2. サービス理念の誕生

そのような中で、“サービス(奉仕)”という概念を最初にロータリーに導入したのは、1908年1月にシカゴクラブに入会したアーサー・フレデリック・シェルドンでした。

He profits most who serves bestと言うロータリーのモットーは、実はシェルドンの発案であり、彼自身がミシガン大学経営学部のマスター・コースで専攻した販売学を基本として、1902年に自らが設立したシェルドン・ビジネス・スクールのモットーでした。

彼がシェルドン・スクールで20世紀の経営学の基本理念として教えていたこのモットーを、ロータリークラブがそのまま受け入れて、ロータリーの奉仕理念として採択したもののようです。当初このモットーの言わんとする所は、自分の儲けを優先するのではなく自分の職業を通じて社会に貢献するという意図を持って事業を営めば、結果として継続的な事業の発展が得られるというシェルドン独自の事業経営の思想なのです。一言で言えば、私はサービス(奉仕)とは、『人の役に立つこと』ということに集約されるのではないかと思います。

現在日本では、「サービス」という言葉は「値引き」「おまけ」「無料」などの意味で使われることや、「商品」(モノ)に対する人的労働の提供を「サービス」と呼ぶことが多いようですので、この解釈は私たちが今まで使ってきた「サービス」とはかなり異なった定義となります。つまり、世に有用な職業に従事して働く行動は、全てサービスだと考えてもいいようにも思われます。

さらに「経営学」の中でシェルドンは、サービス(Service)という単語そのものについて、あまりにも多くの意味を持った単語なので、一言で言い表すことは不可能であると前置きして、サービスを受けた立場から得られる「満足感」であるとも述べています。

一方でサービスをする立場からはどのように表現したらいいのでしょうか。サービスと言うとバーゲンセールの出

血大サービスをイメージし、あまり良い感じがしないのであれば、これを「貢献」と訳しても良いのかもしれませんが。ポール・ハリスは著書(This Rotarian Age)の中で次のように述べています。

「実業界における奉仕の責任を、簡単明瞭に『最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる』という標語でまとめてくれました。誠に感謝のほかはありません。この標語は妙に響くかも知れませんが、他人に対して最高のサービスを捧げようとするならば、その結果、自分にも最高の報いが来る可能性があるという事で、ロータリーの正式の標語になりました。」

#### 3. ロータリー精神(理念)の定義

1923年RI会長となるガイ・ガンディカーは1914年に発表した『五つの課題への協力』(Co-operation along five lines of endeavor)の中で、ロータリー精神を次のように定義しています。『ロータリー精神とは他者に親切に他者を思いやり、食事を分かち合うことであり、最高の意味での利他主義であることを示さねばなりません。貴方の心が他人を思いやり、二百六十六名の会員が“よそ者”でなければ、貴方は様々な出会いを持つことができます。“海にパンを投げよ、それは汝に戻るであろう。”私たちの新入会員にロータリーの理念の衣を着せなければなりません。しかしこれは最初に行うべき最も必要なことではありません。新入会員には先ずクラブが提供する仲間の友情に包みこんで幸せに落ち着かせることが必要です。新入会員を自宅でくつろいでいるような気分させるよう私たちは最善の努力をしているのでしょうか。友情を通じてのロータリーの理解は、お互いに親しく知り合うことによるのみ初めて出来ることです。』

更に、1916年に発刊されたロータリーの教科書とも言うべき、『ロータリーの心得』(A TALKING KNOWLEDGE OF ROTARY)の中では、ロータリーの理念の適用範囲とモットーを次のように述べています。『ロータリーの理念は会員の事業を倫理基準の高い正しい経営に導くと共に、個人生活も律するものである』とし、その適用範囲を規定し、**ロータリーの理念は職業倫理全般に対応すると同時に、いわゆる個人生活における「奉仕」と呼ばれる様々な要素全体を包含している**としているのです。

事業上の高い倫理基準の実践は、「Service, Not Self」と「He Profit Most Who Serve Best」というスローガンで表わされると書いております。つまり、最初にミネアポリスクラブで提唱されていた「Service, Not Self」(サーヴィス第一、自己第二)というスローガンは「He Profit Most Who Serve Best」と同義語として職業倫理全般に対応すると説明しているのです。

#### 4. 奉仕の理想(理念)“The Ideal of Service”の定義

さらに時代が進み1923年になると、有名な決議23-34がセントルイス国際大会で採択されました。(決議23-34については、後日このコラムのテーマとさせて載けますので詳細は省略いたします)「決議23-34」は今や時代遅れな決議だとして軽視される傾向が強まっていますが、「奉仕の理想」(奉仕理念)という文言と、ロータリーの二つのモットーが明記されている唯一の公式ドキュメントであり、その重要性は極めて大きいものがあります。

決議23-34の第1項によれば「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあ

いだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—Service above self—の哲学であり、He profits most who service best という実践理論の原理に基づくものである。」と定義されているのです。

その後、ロータリーに四大奉仕の枠組みが取り入れられた1927年に『目標設定計画』(The Aims and Objects Plan)が発表され、四大奉仕部門の意義と適用の方法の解説書が出版されています。

手元にある1931年にRIが発行した『目標設定計画』(The Aims and Objects Plan)と

いう手引書によれば(東昭二訳)、ロータリーの奉仕の理念についてのその当時の解説が掲載されています。

その手引書によれば「ロータリーでは、これまで“The Ideal of Service”の意味するところを様々な言い方で表してきた」として、次の4つの言葉が列挙されています。

一つ目は、「超我の奉仕」(Service Above Self)。二つ目は、「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」(He Profits Most Who Serves Best)。三つ目は、「他人への思いやり」(thoughtfulness of others)。四つ目は、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(most of all treating others as one would like to be treated)ということになっています。

つまり、1930年当時のロータリアンは、「奉仕の理念」(The Ideal of Service)をこれらの4つの言葉を同義として捉え、同じ意味に理解していた訳です。

言い換えれば、ロータリーの奉仕理念は、これらの4つの言葉が一体となった概念として捉えられているのです。

かつて毎年発行印刷物として発行されていたOfficial Directory(公式名簿)の裏表紙の内側に記載されているA Brief History of Rotaryの中に国際ロータリー初代事務総長チェスリー R. ベリーの言葉として、奉仕理念の定義が書かれていました。“Ideal of Service “奉仕の理念は“Thoughtfulness of and helpfulness to others”**「他人のことを思いやり、他人のために尽くす**」と記されていたのですが、これも上記の3つ目の定義と同一と思われま

す。(Rotary clubs everywhere have one basic ideal - the “Ideal of Service”, which is thoughtfulness of and helpfulness to others.)

ロータリーではThe ideal of service 奉仕理念という言葉が好んで使われます。米山梅吉はポール・ハリスのThe first Rotarian および This Rotarian age の翻訳に当たって、この言葉を『サーヴィスの理想』と訳し、その後、誰かがこれが奉仕の理想と変更し(『奉仕の理想』という有名な歌もあるくらいですが)、最新の日本語訳では奉仕理念になりました。

いずれに致しましても、ロータリースピリット(精神)、ロータリー理念、奉仕の理想、奉仕理念、と表現はそれぞれ違いますが、すべて同じ意味を表す言葉として使われてきたものと思います。その意味するところは、**「他人への思いやりを持って(利他の気持ちで)、世のため人のために役立とうとする心**」と言うことになるのではないかと思います。また、それを表す2つのモットーも渾然一体となったものと解釈できるのではないかと考えています。このロータリーの奉仕理念は100年経過した今日も変わることはなく、また絶対に変えてはならないものだとは信じております。